

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 英語の音声学習と指導

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出世, 直衛, Shusse, Naoe メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000282">https://doi.org/10.57529/00000282</a>

# 英語の音声学習と指導

## 出世直衛

### 1. 序論

#### 1.1. 化石化

外国語学習においては、化石化が必ず生じる。化石化とは、学習がある段階で停滞し、しばしばそこで終わってしまう現象だ。ゆえにほとんどの外国語学習者には母語話者と異なる文法、語彙、変則的音声などが残存する。外国語学習における化石化の大きな原因のひとつは母語からの干渉である。

字義通りに考えるならば、化石化は母語にも生じている。一通り獲得が終わった母語は定常状態に達し、語彙の増大などを除けばそれ以降変更されることはあまりない。母語話者にとって、自分が獲得した特定の変種とは異なる変種の音声を使いこなすのはなかなか困難だ。ゆえに訛から出身地をある確度でもって推定することが可能である。母語（母方言）とは異なる変種を使いこなしているように見える<sup>(1)</sup>俳優たちも、実際の言語場面ではおそらく母方言以外の変種を变幻自在に操ることはできないだろう。転居などの理由で母方言と異なる変種を使わなければならない場合も、付け焼き刃的対応に終わるだろう。筆者は東京方言を話し始めてすでに41年目になるが、時々自分の発話の中に非東京方言的音声現象を発見することがある。

さてこの化石化は、音声面において顕著に現れる。いわゆる臨界期仮説では、かなり早い時期でなければ母語話者と等しい音声獲得はできないとする。この「かなり早い時期」がいつなのかは、諸説あって定まらない。よく知られた例だが、その昔米国国務長官を務めたヘンリー・キッシンジャー氏<sup>(2)</sup>の音声英語には第一言語であるドイツ語の影響が色濃く残存している。が、彼の書いたものには外国語の影響など微塵も感じられない。また、母音・子音などのセグメント（単音）は、かなり後になっても獲得が可能かもしれないが、プロソディー（韻律）的側面の獲得限界はかなり早く訪れる可能性があるようだ。場合によっては6～7歳頃かもしれない<sup>(3)</sup>。以下では音声的側面、特にセグメントにおける習熟に焦点を当て

る。

## 1.2. 目標

外国語（日本の場合はほぼ一義的に英語）の音声学習については、昔から不毛な議論が存在する。これは筆者がまだ大学生だった頃にすでに存在したので、少なくとも40年以上の歴史を有するはずだ。曰く、英語学習で重要なのは、発音（形式）なのか、中身（内容）なのか……。これほど無意味な議論はほかにあまりないだろう。なぜならば、了解可能性がなければ全く「中身」とやらは伝わらないからだ。理想的には、外国語の音声の細部に至るまで、完全に複製できることを目標とするのも悪くない。が、これは「中身VS発音」論争の好餌となりそうな気がする。理想を語ることは美しい。外国語においても、通常の母語話者と同等の発音ができの方がいいに決まっている。ただ、それが本当に可能なかどうかは議論の余地が大いにある。

まずは適性の問題がある。ヒト（というか正確には全ての生物）は自分の適性が希薄な行為は努力してもなかなか達成度が上がらないものだ。これは「やればできる」神話のアンチテーゼである。「100メートルを10秒未満で走りきる」ことならば、だれも「やればできる」などという不条理を口にすることはないのに、こと中等教育においては人はこの神話あるいは幻想にとらわれがちだ。母語獲得が一通り終わってしまったヒト（高校生、大学生、大人）にとって、外国語音声の学習には通常は大きな困難が伴うことを理解するべきである。セグメントとプロソディーでは学習困難度が違う（プロソディーの方が困難）ようなので、セグメントのレベルで母語話者と同じ調音ができたとしても、プロソディーのレベルでは、母語干渉が増すかもしれない<sup>(4)</sup>。

また、セグメントのみに焦点を絞っても、余剰的特徴の現れ方には個別言語独自のものがあるので、難易度が上がるかもしれない。例えば、英語の/p//t//k/は語頭環境においてただ無声であるにとどまらず、閉鎖解放と声の始まるの間に百ミリ秒弱の時間差を持ち、この時間差の間にいわゆる「氣息」が観測される。日本語の同環境の/p//t//k/にはそのような時間差も氣息も存在しないことが多い。この二つ（有気音と無気音）は聴覚的に明確な差があるので、これらを同じに調音することは外国語訛を構成するだろう。このような事象は普通に存在する。

現実的に、外国語音声の習熟度及び到達度を考えると、以下のようになるかもしれない。

- I すべての外国語音声之母語のそれで代用しているレベル。
- II セグメントは母語干渉があるが了解可能。プロソディーは母語の干渉が強い。
- III セグメントでは母語干渉はほぼ無いが、自然な音変化とプロソディーに間

題あり。

IV音変化やプロソディーも含めて、ほぼ完全に母語話者並みの発音・発話ができる。

理想はIVだが、現実的にはⅢあたりが万人向けの目標である気がする。ただⅢもかなり困難な目標なので、Ⅲを視野に入れつつⅡを達成できれば中等教育においては上々かもしれない。なお、レベルVがあるとすれば、それは「母語話者」レベルなので、外国語音声習熟の到達目標としてはふさわしくない。これは100メートルを9秒台で走るような目標だ。つまり、相当な適性と努力の両方を必要とする。

## 2. 各論

### 2.1. 「同じ音」は存在するか

本稿冒頭で、化石化の大きな原因は母語からの干渉であると述べた。この干渉は、外国語学習のあらゆる段階において学習者につきまとう。ドイツ語を学ぶ英語母語話者については、無声硬口蓋摩擦音[ç]及び無声軟口蓋摩擦音[x]が大きな困難を提示する。まず、この二つが[k]（閉鎖音）と異なることを認識できないようだ。ゆえに英語訛のドイツ語ではichは[ɪk]となり、音楽家Bachはbackと同音[bæk]になる。逆に英語を学ぶドイツ語母語話者は、back/bagのような語における語末の有声・無声の区別（/k/と/g/など）を苦勞して学ばなければならない。ドイツ語では語末において有声・無声の対立が中和されるが、英語では語末においてもその区別が生きているからだ。

それぞれの言語は、ヒトにとって調音可能な音声レパートリーの中から任意の部分を使用していると考えられる。その「任意の部分」が、ある2言語について言えば、重なる部分があれば、重ならない部分もある。また、重なっているように思えるが、現実にはずれがある場合もある。場合分けをすると、範疇（A）同じであるもの、範疇（B）類似しているが違うもの、範疇（C）全く異なるもの、に分けられる。日本語と、アラビア語やカンナダ語のように系統的には無縁の言語同士では（B）や（C）が増えると予想できる。日本語と英語も系統的には無縁だが、（A）あるいは（B）と思えるものがかなりある。ただし、学習者が（A）であると判定しているものが、本当に（A）であるのかどうかは議論の余地がある。

例をあげると、英語の/t//d/と日本語の/t//d/はおそらくおおかたの日本人英語学習者にとって「同じ音」として認識されているようだが、現実には同じではない。これらは英語では歯茎閉鎖音であるが、一般的な日本語では歯音化されるのが普通だからだ。ただしこの差は、伝達には影響しない。先ほどのレベルIV

を目指すのでなければ無視してかまわない。外国語訛を構成する可能性はあるが。

英語の無声閉鎖音について問題なのはむしろ、その実現形が日本語とは違う形で環境によって規定されていることだ。英語の語頭無声閉鎖音は有気音だが/s/の後では無気音となることはすでにのべた。日本語ではどのような環境でも通常無気音である。氣息性の有無は英語でも意味の区別に関与しないので、余剰の特徴である。英語の語頭の無声有気閉鎖音を(日本語的)無気音で代用してもコミュニケーションに大きな支障はない。が、これは英語話者にとって外国語訛として響く可能性が高い。ということは、日英語の/p//t//k/は/s/の後では(A)だが、語頭では(A)ではないという妙な結論となる。

英語の/s/は日本語の/s/にととてもよく似た音だが、これは(A)なのか(B)なのか。単独で発音した場合、英語話者の/s/は平唇だが、日本語母語話者では若干の円唇があるように思われる。/s/が語末(発話末)に来たときには平唇と円唇では明らかに聴覚印象が違うので、/s/は(B)であると判定できる。が、これもまたp//t//k/の氣息性と同様に、伝達には影響しない。しかし/s/の有声バージョンである/z/は明らかに(B)の範疇に属している。英語の/z/は摩擦音だが、日本語の/z/は語頭では通常破擦音化し[dz]となる。また日本語では有声破擦音と有声摩擦音の区別がないので、cars/cardsのような語で日本語母語英語学習者は区別が困難となる。

英語の/ʃ/は日本語母語学習者によって日本語の口蓋化された/s/ (つまり [ʃ])で代用されることがほとんどだが、英語の/ʃ/と日本語の[ʃ]は調音場所が異なる。英語の方が口腔内においてずっと後ろ寄りであり、聴覚印象が違うため、範疇(B)である。ただし、この代用はコミュニケーション上大きな問題はない。

(C)の「全く異なるもの」の代表例としては、英語の/r/やθ/ð/がある。しかしこれらも往々にして日本語母語英語学習者にとっては、母語にあるもっとも類似した音と同型であると感じられているようだ。すなわち、thinkを[sɪŋk]と発音してしまうのがよくある間違いだ。この語については、本来/ɪ/であるべき母音が[i]で代用されるエラーもよく起きる。これは意味を区別する音のペアなので、コミュニケーション上の障害となり得る。

さて(A)の範疇に属する音が日英語間で本来にあるかどうか考えてみたとき、候補がいくつかあがる。たとえば/b/は有力な候補だ。スペクトログラム上で観察すると、語頭の位置で日本語の/b/は閉鎖解除と声の始まりがほぼ同時であるか、あるいは声の始まりが閉鎖解除に先立つことが多いが、英語の/b/では閉鎖解除にわずかに(20ミリ秒ほど)遅れて声が始まることが多い。が、この日英語の/b/を聴覚的に聞き分けることは困難なので、語頭では日英語の/b/は実用的にはほぼ等しいといえる。が、問題は語末に来たときで、英語ではcap/cabのような場合、/b/は無声化されることが多い。のみならず、語末の閉鎖音は閉鎖解放が義務的ではないので、閉鎖のみにとどまることも多い。したがって、実際に

は/p//b/の区別は直前の母音の長さによってなされている。日本語の「アパレル」「暴れる」ではそのような違いはない。そもそも語末に閉鎖子音が来ることは通常日本語では無い。また、語中では日本語の/b/は摩擦音化し、[β]となることが割とあるので、果たして/b/は範疇(A)に属するといえるのかどうかは微妙だ。かなり近い音同士ではある。

日本語の/g/もまた、環境によって微妙な違いを来すので、日英語で/g/は必ずしも範疇(A)であるとはいいがたい。語中において日本語ではガ行音は東京方言においてはいわゆる鼻濁音化し[n̥]となし、関西方言等では同環境で有声軟口蓋摩擦音と化す。

/h/も範疇(A)の候補とでであると考えることができる。ほとんどの場合、日英語の/h/は同じと言って差し支えないが、/i/に先立つ/h/は日本語では[ç]となるのが通例なので、/h/が(A)に属すると断言することは難しい。

/m/と/n/もまた、多くの環境で日英語で差がないが、語末においては日本語では[n]は出現しない。音声的には語末に[m]が来ることがあるが、それは「ん」の異音であるので、範疇(A)ではなく(B)であるだろう。

このように音声環境を考えると日英語の子音に関して(A)は存在しないのではないか、という結論がほの見えてくる。そもそも日本語の音節構造は基本的にCVなので、英語のようなCVC型が多数を占める言語と違って子音で終わる語が音韻的には無い。もっとも、日本語「ん」を子音に数えるなら、CVC型の語は多数存在するが、この「ん」はきわめて変則的なセグメントである<sup>(5)</sup>。

日英語の母音は、範疇(B)と(C)がほとんどを占める。範疇(A)である可能性があるのはわずかに/ε//i/のみだ。/ε/は日本語の「え」で代用しても問題ないが、音色が英語(米語)の場合少々異なり、日本語の「え」より開きがやや大きいので、細かいことをいうと(そして音声学者は細かいことをいう人種である)これはやはり範疇(B)だろう。/i/の音色自体は日英語で同じと言って差し支えないのでこれは範疇(A)であるといってよさそうだ。ただし、英語の長母音/i:/と日本語の「い」はプロソディーにおいて相違が顕著すぎる。

### 3. 日本語母語学習者の問題・・・子音

#### 3.1. 閉鎖音

上述のように、英語のいわゆる無声閉鎖音は、日本語母語学習者に対して大きな問題を提示しないが、語頭では有気音であること、/s/の後では無気音であること、語末では閉鎖解放は必須ではないこと、などを明示的に学習者に示す必要がある。日本語でも英語でも有気性の有無が意味を区別することはないが、英語では有気・無気性が環境により出現・非出現がほぼ決まるのに対して、日本語では有気・無気の違いは自由変異に過ぎない。直観的観察では、一般的な日本語母

語学習者は、意図的に有気音を出すことが苦手であるようだ。

閉鎖解放をしない(破裂しない)閉鎖音は日本語母語学習者にやや大きな困難をもたらす。これは特に聞き取りにおいて顕著である。まず、語末において閉鎖解放が随意的であることを明示的に伝え、解放しないタイプの発音にも慣れさせるべきである。

bad/batのような、語末における有声・無声閉鎖音の対立は、現実的には閉鎖音自体の有声性の有無ではなく、母音の長さが担っていることも学習者に明示する必要がある。一般的に有声閉鎖音の前では母音が長い。だいたい、語末閉鎖音は閉鎖解放が随意的なので、直前の母音によって区別する以外に手がかりはない。

また、閉鎖音連鎖において最後のものだけが閉鎖解除が義務的であり、それ以外は閉鎖解除は通常行われないことも、学習者に明示的に伝える必要がある。aptにおける/p/は通常未解放のまま終わり、/t/のみが閉鎖解除される。あるいはact twoにおいては、/k//t//t/と閉鎖音が3つ連続するが、これも最後の/t/のみが通常解放される。

writtenやgardenなどの語にあるように、/t/あるいは/d/が/n/と連鎖するときにいわゆる「鼻腔破裂」となることも明示するべきだ。もちろん鼻腔破裂ではない、[tn][dn]の連鎖も了解可能性的に無問題だが、圧倒的に自然なのは鼻腔破裂である。鼻腔破裂は学生にとって難物であるらしく、初回でモデル発音の複製ができる者はきわめて少数だ。

一般米語について述べるなら、母音に挟まれた位置(water, flatter, ladderなど)における/t//d/は弾音化と呼ばれる現象を起こすのが通例だ。IPA表記ならば[r]だ。弾音化は北米的英語のきわめて目立つ音声特徴のひとつである。時に弾音化は控えめにした方がよい、などと言われることもあるが、筆者の経験則からすると、米人相手の場合弾音化を行わないと了解可能性が減少する。よって、可能な限りした方がよい。また、弾音化は語の境界を越えても生じることも明示的に伝える必要がある(例: It is [ɪrɪz])。弾音化と上述の有気音化によって、great apeとgray tapeのペアが音学的に区別可能(great apeの/t/は弾音化し、[gɹeɪrɪp]に、gray tapeの/t/は語頭なので氣息化して[gɹeɪtʰeɪp]となる)だが、これは日本語母語学習者にはかなり困難だと思われる。

### 3.2. 摩擦音

/f/は日本語母語学習者自身は問題ないと考えている傾向が強い。しかし/f/は日本語の「ふ」「ふぁ」などの語頭に立つ両唇摩擦音[ɸ]で代用されることがきわめて多く、語頭・語中・語末の、あらゆる環境において問題が生じる。この代用は、おそらく了解可能性は保持されつつも、やや濃い外国語訛を話者に付与するはずだ。/f/と[ɸ]を聴覚的に区別することも、日本語母語学習者には難しいようなので、視覚的手懸かりを与える<sup>6)</sup>。なお、/f/は日本語母語学習者にとってか

なり難しい部類に属する。執拗な反復練習を経た後の段階ですら、意識しなければ[ϕ]に戻ってしまっている。

/f/の有声音である/v/はさらに困難だ。/f/と同じく、語頭・語中・語末の全ての環境で困難をもたらす。まず①/v/と/b/が別の音声であること、そして②この二つは英語で意味を区別すること、しかも③機能負担量の多い区別であること、を理解しなければならない。①については、/v/は摩擦音なので/v/自体の持続部分があるが、/b/は閉鎖音(破裂音)なので、/b/自体は一瞬で調音完了することを、音声モデル提示により理解させる。また、vの英語アルファベットとしての文字名は/vi:/であって、/bui:/ではないことを理解させる。なおこの/v/について、①②③がどうしても理解できない者が一定割合で存在するようだ。このタイプの者については、対処法が不明だ。

/θ/と/ð/は相変わらず日本語母語学習者の弱点であり続けている。それぞれ/s/と/z/で代用する傾向が強い。この二つの音を含む語は基本語が多く、基本語は出現頻度が高いので/s//z/で代用することはコミュニケーション上の障害をもたらすし、もちろん強い訛があると感じ取られるだろう。/ð/は特に機能語(this, that, these, those, the, thereなど)において出現するので注意を要する。一般的に英語母語話者はこの二つをやや歯音化して調音するようだが、日本語母語学習者に指導するときは定石通り歯間音として提示するべきである。混乱を防ぐためだ。theやthatなどにおいて、[dʒə]や[dʒæt]にならないよう注意喚起する。

英語の/s/については日本語母語学習者の場合、やや深刻な問題がある。日本語のさ行音のうち、「し」が口蓋化した結果、「[ʃ]」と発音される傾向をそのまま英語に持ち込むことだ。よく知られていることだが、その結果see/sheやseat/sheetなどの区別がつかなくなる。英語の/s/と/ʃ/は機能負担量の大きい区別なので、これを無視することはコミュニケーション上の障害が起こりうる。英語の/z/には/s/ほど大きな問題はないが、それでも日本語の音体系の中ではザ行音は語頭では摩擦音、語中で摩擦音であるのが通例なので、zincを[dzɪŋk]ではなく[zɪŋk]と正しく発音する練習をする。

/ʃ/の有声バージョンである/ʒ/は英語ではもともと外来語(フランス語からの借用語)においてもっばら出現する音なので頻度は低い。しかも英語では語頭に立たないし、好都合なことに、日本語の「じ」「じゃ」なども語中では摩擦音化するので、日本語母語学習者にとっては容易な区別であるはずだ。ただし、少ないながら最小対が存在する(pleasure/pledgerなど)ので一応指導はしておくべきだが、優先度は高くない。

### 3.3. 鼻音

/m/についてはまず、母音直前の環境で「横着せずに両唇の開閉をする」ことを徹底させなければならない。これは最近の日本語で(とくに若い女性において)



/m/が唇を閉鎖させないどころか、唇をほんのわずかしが使わない鼻音化された渡り音として出現する傾向が強いからだ<sup>(7)</sup>。円唇の弱い[w]を鼻音化したような音だ。英語の/m/をこれで代用するのはまずい。

日本語母語学習者が/n/について持つ問題は、語末（というより発話末）において、日本語の「ん」をもって代用してしまうことだ。「ん」はこの環境で[ŋ][m]および鼻母音といった実現形を持つ<sup>(8)</sup>のに対して、英語の/n/は発話末でも常に[n]である。日本語母語学習者には、「舌先を歯茎に付けること」「口が開いていること」を明示的に提示しなければならない。英語の/ŋ/については、singとsinのように/n/とは区別があること（つまり意味を区別する）を理解させる。だがこの二音の聴覚的区別は日本語母語学習者にとって絶望的に難しい。

### 3.4. 流音 (/l/と/r/)

日本語母語学習者にとって、鬼門とも言える区別だ。日本語に流音が一種類しかない（ラ行音）ことに起因する。母語において一種類しかないのに、目標言語において二種類以上の区別が存在するとき、学習者は大きな困難を覚えるようだ。ただし、個々の音の指導は/l/と/r/の場合、意外なほど容易である。/l/については舌面接触の範囲と強さ、持続時間を明示的に指導する。/r/は口腔内で反り舌の状態を作り、声を出させ、後続母音へ素早く移動していく指導をする。付随的特徴として/r/には円唇があることも明示的に述べる。この二音については、音自体の学習は問題が少ない。むしろこの二つが意味を区別すること常に意識し、二音を常に区別し続けること、が困難である。

/l/と/r/の区別はヨーロッパ語ではごく普通に行われる区別であるが、実のところ、英語の/r/は他の西洋語と比べてかなり異質である。スペイン語を母語とする英語学習者は/r/を舌尖による震動音（いわゆる巻き舌）で代用するだろう。標準的フランス語、ドイツ語を話す英語学習者は/r/を口蓋垂の震動音で代用するかも知れない。これらの代用は実際にはコミュニケーション上は問題があまりない。外国語訛としては顕著であるが、意味を区別するためには無問題だからだ。これら西洋語に比べて、日本語母語学習者の場合は/r/をラ行音で代用することは決定的にまずい。ラ行音では舌先が歯茎を一瞬叩くので、どちらかというとな/l/に近い聴覚印象があるからだ。

### 3.5. /r/を含む子音結合

/tr/は通例破擦音的に発音される。つまり[t]を発音し終えた後に[r]を作るのではなく、この二つを同時に調音することを理解させ、複製させる。また、/t/が語頭で有気音であるため、その有気性は/r/に及ぶことになり、結果/r/はその調音過程のかかなりの部分が無声・有気である。ただし、この「同時性」「/r/の有気性」のどちらも守らなくともコミュニケーション上、たいした問題は無い。が、

話者が非母語話者であることを周囲に示すだろう。/dr/も/tr/と同様、破擦音的・同時調音的に作られる。ただ、/d/は有声音なので/r/の無声化は生じない。

### 3.6. 半母音 (/w/と/j/)

半母音/w/と/j/については、持続部を持たない渡り音であって、音の（つまり調音器官の）移動自体にその本質があることを理解させなければならない。we/wi:/は/u/プラス/i:/ではないが、日本語母語学習者の中にはそのような発音をする者も結構いる。woodやwomanのような語で、/w/に接続する後続母音が/u:/か/u/であるときは日本語母語学習者にはきわめて困難だ。唇を強く丸めた状態から、やや強く丸めた状態へ素早く移動していくときに出る音であることを、視覚的手がかりとともに練習する。

/j/も/w/と同じような指導をする。前舌部の位置が非常に高い状態から後続母音へ移っていく音だが、year/earおよびyeast/eastなどの最小対は困難を極める。

### 3.7. 連声

一般的に英語の子音は、意味のまとまりの中で語境界を越えて後続母音と連続する。閉鎖音は語末では解放が義務的ではないが、次の語が母音で始まるときは解放される。makeが発話末であるならば/k/の閉鎖は解放してもしなくてもかまわない。がmake itでは/k/はほぼ必ず後続のitの/i/とつながって発音される。この連結は閉鎖音だけではなく、その他のほぼ全ての子音で日常的に行われる。日本語母語学習者の場合にこれが特に問題になるのは鼻音に語境界を越えて母音が接続するときだ。on a dayのような語句で、/n/が次の母音と接続することで[nə]という音節を作ることを指導しなければならない。そもそも英語学習の一番最初に習いそうな文This is an apple. (あるいはorange) に、すでこの現象は登場しているのだが。いわゆる明るい/l/と暗い/l/も、この後続母音との連結の延長線上にある現象だ。

## 4. 効果的学習のために

### 4.1. 発音表記

外国語（英語）の音声指導は様々な困難を含む。そのなかで、音声表記の問題は大きな一角を占める。英語音声と日本語音声は、重なり合う（と思われているが）、微妙にあるいは大きく異なるものがけっこうあるので、教室の現場においてコトバを使ってその差を記述することに加えて、音声記号を使う必要性が生じてくる。既出の例だが、英語のbeat/bit/とbit/bit/の母音の差を日本語母語学習者に言葉で伝える場合、以下のようなになるだろう。すなわち、「前者beatの母音はより高い舌の位置と、調音器官のより高い緊張度で調音され、音質的にはほ

は日本語の「い」と等しいが、後者bitの母音は「い」と「え」の中間的な音であり、緩んだ感じのする音だ」、と。このように学生達に提示し、口頭練習も行うのだが、この2音について言及するときにどうしても音声記号/i:/と/i/が必要になる。そもそも、/i/が/i/と異なる字体で表記されるのは、おおかたの日本語母語学習者の期待と想定に反して、この二つの音質が異なるためだ。英語のhood (/hʊd/)とwho'd (/hu:d/)の母音の差も、同じような音質の差であるので、差があることを示すためにも/u/と/u:/という異なった記号が必要である。

だが現行の指導要領では発音記号(発音表記)はさほど重視されていないようだ。「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」では「音声指導の補助として、発音表記を用いて指導することができること」という項目の中に

実際の音声と発音表記との関係を理解し、発音表記に慣れ、それを見て音声を再現することができるようになれば、音声の習得はより容易なものとなる。また、自学自習の有効な補助手段ともなる。このため、「発音表記を用いて指導すること」も可能であることを示している<sup>(9)</sup>。

と一応の有用性を認めつつ、

ただし、あまり専門的に詳しく指導することは生徒に過度の負担をかけることとなるおそれがあるので、基本的な表記について、必要に応じて指導するよう配慮することが大切である<sup>(10)</sup>。

とあるように、高校の英語教育において発音記号を使って指導してもよいが、生徒の負担になるようならしなくてもよい、というスタンスのようだ。だがこのことはある問題を提起する。現状では、英語教員を目指す大学生の多くは実質的に発音記号に触れずに大学に入ってくる。そして國學院大学のような環境では、発音記号を学ばずに教科に関する(英語)科目の単位を取得し、教員免状を得ることが可能である。もちろん発音記号を知らなければ発音指導ができないわけでは必ずしも無いが、発音表記について無知な英語教員というのも中途半端な存在である。楽譜を読めない(当然書けない)音楽教諭を考えてみればよい。加えて、上記引用の「必要に応じて指導するよう配慮する」べき「基本的な表記」はどこまで含むのか、ということでもある。上で述べた/i/と/i:/や/u/と/u:/はこれに含まれるのだろうか? なお、英語のセグメントを表記する音声記号で、通常のアルフベットと異なる字体のものは/ɪ æ ɑ ɔ ʌ ə ə, ε θ ð ʃ ʒ ɲ/と、相当に数が多い。どこまでが「基本的表記」に入るのかは現場の判断に任せるといことなのだろうか?

#### 4.2. 音声学は必要か…英語教員の場合

外国語の音声学習は、体育実技的要素、あるいは音楽実技的要素と共通点があるように思われる。あるスポーツ競技のルールを知悉しているからと言って、その競技のプロになれるわけではないし、完全な音楽鑑賞能力を持つ教養人が、何の楽器も弾けず、歌唱はジャイアンレベル、などのような例もしばしばありそうだ。英語で小説を書いたという共通点を持つポーランド人のコンラッドやロシア人のナボコフの例をあげるまでもなく、外国語の文法、読み書きなどで傑出した能力を持つ個人が、音声面では強烈な母語訛でその外国語を話す、というのはよくあることのようにだ。一度覚え込み自動化が完成した行動（母語の発音）と、大きく異なる、あるいは微妙に異なる動作を、異なるルールに従って行うことを求められるのが外国語の音声学習である。ドイツ語と英語のように系統が近い言語同士ならば、比較的容易に学習が進むかもしれないが、それでも前述したようにドイツ語の[ç]及び[x]を苦手とする英米人ドイツ語学習者は多いことだろう。日英語は系統的に遠いので、日本語を母語とする英語学習者はドイツ人英語学習者よりもさらに苦勞を強いられる。

適性が天才的レベルにある者ならば、ある外国語音を聞いたときにその聴覚印象から、調音に必要な筋肉の動きを推察し、完全な音声的複製を作ること、そしてその複製の作り方を脳内に保持しておきon demandで引き出せるかも知れない<sup>(11)</sup>。この能力をすでに失った後期青年期にある大学生が、外国語音声を効果的かつ効率的に学ぶには母語と当該外国語の音声の調音に際して、自分の調音器官のふるまいを運動感覚的に理解し、そのふるまいの運動感覚記憶を保持することが必要だ。教室内で提示された音声モデルをその場で模倣することは器用な(適性のある)学生ならば簡単である。問題はしばしば彼らですら、しばらく経つと音声モデル再現ができなくなることだ。これは「運動感覚記憶を保持すること」ができないからだ。ついでながら、調音器官の運動感覚的理解は調音音声学の重要な一部である<sup>(12)</sup>。

先ほどの「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」によると高校科目の「総合英語」では

生徒の実態に応じて、弱音、音の脱落、連結、同化などの音声的な特徴を取り上げることとなる<sup>(13)</sup>。

とある。これら（弱音、音の脱落、連結、同化）は全て音声学用語であるし、これらの音声現象を理解し指導するには、どうあってもかなりの音声学的素養を必要とする。ゆえに4.2.の問いかけへの答えは「英語教員にとり音声学は必要だ」となる。このきわめて我田引水的結論でもって、本稿を終えることとする。

注

- (1) ドラマ・映画のエンドロールで「方言指導」なる項目が存在するゆえんだ。
- (2) 14-5歳で米国移住。
- (3) もしそうなら、学齢は生物学的根拠がある。
- (4) プロソディーは、疑問符などを除けば当該言語の正書法に反映されないので、非母語話者には難易度が増す側面がある。
- (5) 音韻的「ん」の実現形は多岐にわたる。それらに共通するのは、「鼻音であること」のみである。
- (6) 両唇摩擦音では「両唇」を使うことは顔を見れば分かる。
- (7) 動機は笑顔の維持だ。
- (8) 「かん」のような、語末に「ん」が来る語を教室で発音させると、見事にこの3つが現れる。
- (9) 「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」 p.47
- (10) 「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」(同所)
- (11) この能力は我々正常な人類の成年個体は幼少期には持っていたが、すでに失っている。
- (12) Catford, J.C. (1988) *A Practical Introduction to Phonetics*. p.6
- (13) 「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」 p.61